訂改 高等女子讀

46
810
BA39

42128
教科書文庫
4
810
42-1906
20000
67673

資料室

46
810
明39

明治三十九年一月二十五日 文部省檢定濟 高等女學校用 國語科書

女子高等師範學校教授 佐藤球校訂
明治書院編輯部編

改訂高等女子讀本

東京 明治書院

広島大学
教
67673
図書

改訂 高等女子讀本 卷七目次

一、國語と愛國心……一
二、國語國文の變遷……七
三、物まなびの心ばへ……一二
四、花くらべ……一四
五、交際と文學……二一
六、紫式部の碑文の補遺……二七
七、稅所敦子の君の棺前に誄す……三〇
八、宮城御移轉の記……三六

九、福原の遷都……四〇
一〇、養和の飢饉……四四
一一、忘れがたみその一……四八
一二、忘れがたみその二……五二
一三、家範……五六
一四、德川溶姫……五九
一五、人の妻……六二
一六、荒木田麗女……六五
一七、平氏の都落……七〇
一八、戊辰の昔譚の一節……七八
一九、野末の伏屋（新體詩）……八四

二〇、和歌の感興……八八
二一、平忠度と藤原俊成……九二
二二、小枝の笛……九六
二三、鳳笙の秘曲……一〇一
二四、ジャンヌ、ダルクその一……一〇四
二五、ジャンヌ、ダルクその二……一〇八
二六、ジャンヌ、ダルクその三……一一四
二七、ジャンヌ、ダルクその四……一一九

卷七目次　終

改訂高等女子讀本卷七

一、國語と愛國心

わが日本國は、一家族の發達して、一人民となり、一人民の發達して、一國民となりしものにて、神・皇・蕃別の名ありといへども、今日にては、すべて、これ等の區別は、全く、鎔化し去られたり。こは、實に、國家の一大慶事にして、一朝、事ある秋に當り、われわれ、日本國民が、協同の運動をなし得るは、主として、その忠君愛國の大和魂と、この一國一般の言語とをもてる、

大和民族あるによりてなり。故に、日本國民の義務として、この言語の一致と、人種の一致とをば、帝國の歷史と共に、一歩も、その方向より、誤り退かしめざるやう、勉めざるべからず。かく、勉めざる者は、日本國民を愛する仁者にあらず。また、日本帝國を守る勇者にあらざるなり。

およそ、一人民が話す言語と、その人民の性質との間には、最、入り組みたる關係あるものにて、その人民が、一事物に對して感じ、或は、考ふる、すべての事は、みな、その言語に反射し出づるなり。故に、言語は、その話す人の、精神上に生活する思想、および、感情が、外に出でて、化身したるものなりといふとも、決して、不可なきなり。

試に、支那語を見よ。いかに、仁義の道が、彼等の間に行はれしかは、歷史をまたずして、言語の上に明らかなり。文人國には、詩歌の語、多く、發達し、武人國には、武人の語、多く、繁昌す、英語の、商業における、佛語の、社交における、獨逸語の、學問における、皆、それぞれ、その人民の長所によりて、發達したるなり。

言語は、これを話す人民にとりては、恰、その血液が、肉體上の同胞を示すがごとく、精神上の同胞を示すものにして、これを、日本國語にて、たとへていはば、日本人の精神的血液なりと、いひつべし。日本の國體は、この精神的血液にて、主として、維持せられ、日本の人種は、この、最、つよかるべく、最、永く保存せらるべき、鎖のために、散亂せざるなり。故に、大難の一度

來るや、この聲の響くかぎりは、四千萬の同胞は、いつにても、耳を傾くるなり。いづこまでも赴きて、飽くまでも、助くるなり。死ぬるまでも、つくすなり。おかして、一朝、慶報に接する時は、千島のはても、沖繩のはしも、一齊に、君が八千代を、ことほぎたてまつるなり。

かくの如く、言語は、國體の標識となるのみにあらず。これと同時に、又、一種の教育者、所謂、なさけ深き母にてもあるなり。われわれが生るる、やがて、この母は、われわれを、その膝の上に迎へ取り、懇に、この國民的思考力と、この國民的感動力とを、教へ込みくるるなり。されば、この母の慈悲は、誠に、天日の如し。苟、この國に生れ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰か、この光を仰がざるべき。

言語の上には、われわれが、心中に、一日も、忘れかぬる生活、ことに、人生の神世ともいひつべき、小兒のころの紀念が、結びつき居るものと、知るべし。われわれが、いとけなかりし頃、終日の遊につかれはてて、すやすやと、眠に就かむとするを、その母君は、いかに、やさしき聲にて、ねよとの歌を謳ひ給ひしか。頑是なき小兒心に、わるふざけなどして、うち廻りし時、われわれの嚴しき父君は、いかに、おごそかに、教訓を垂れ給ひしか。さては、隣家の垣に攀ぢて、餘念なく、栗の實を拾ひたる、或は、春のうららかなる野邊に、友だちと、蓮華などを摘みあるきたる當時より、つかひ來れる言語は、當時の人名、當

時の地名と共に、なにともいはれぬ快感を、われわれに與ふるなり。次には、小・中學校のことば、次には、學生のことば、或は、市民としてのことば、或は、職業により、階級により、地方によりてのことば等、皆、それぞれの生活を、この上に反映す。故に、外國にて、人となりしか、或は、外國人の學校にて、外國語の教育のみを受けたる人ならざるかぎりは、この言語の恩澤を蒙り、この言語に、感謝の意を表せざるものはなかるべし。

されば、國民が、その國語を尊ぶことは、一の美德にして、偉大なる國民は、必、その自國語を尊び、決して、これをおきて、他の外國語を遵奉せず。情の上より、自國語を愛し、理の上より、その保護改良に從事し、以つて、眞正の國民を養成せむことをつとむ。現今の獨逸の如きは、その一好例なり。およそ、いづれの國を問はず、苟、國家の觀念の上より、その一員たるに愧ぢざる、人物養成を以つて、目的とする以上は、常に、まづ、その國の言語、次に、その國の歷史、この二つをないがしろにしては、決して、その効を收むること能はず。これ、國民たるものの、須臾も、忘るべからざることなり。（上田萬年著國語のため）

二、國語國文の變遷

中古、漢文の、佛法と共に、わが國に入りきたりし時は、恰、渴者の水を得たるがごとく、非常の熱度をもて、歡迎せられ、漢文をもて、公私一般の用文となし、律・令・格・式より、歷史・風土記

の編纂、裁判の宣告、官吏の請暇、その他、租稅の帳簿、貸借の證文に至るまで、すべて、皆、不十分ながらも、漢文を用ひしめたり。この時の人の思想には、その語源・語法をことにしたる漢文と、國語とは、遂に、相合一すべからざることを、思はざりしか。或は、また、漢文・漢語を用ひて、わが固有の國語を、樸滅せむとの企なりしか。今より、測り知るべからざれども、とにかく、一國の國民としては、一國の命運と共に、固有の國語を愛重すべきことを、忘れたりしがごとし。固有の國語を樸滅するは、事情のゆるさざるところにして、當時、實際のありさまは、漢文は、ひとり、博士學士の間におこなはれ、僧侶におこなはれ、國民の一部におこなはれしにとどまり、政事上の公文、および、政府編纂の歷史は、形式の美觀にとどまりて、一般の國民にとりては、到底、その耳目に熟すべくもあらず。かへりて、文武離隔し、朝野蔽塞して、大政振はざる原因とはなりしなり。

かくのごとく、擧世、迷霧の中にありしかど、幸に、豪傑の士ありて、音韻、および、假名の用法を發明し、これを、通俗に用ひ、また、和歌に用ひ、國語と、相密著して、自在に、使用するを得しめ、その後、また、一歩を進めて、漢字まじりに活用し、國語を經とし、漢字を緯とし、國語を主とし、漢字を客として、さらに、一層の便利を感ぜしめたり。

かくて、假名は、一般に、便利を感ぜしめたるにかかはらず、

また、その使用法の、更に、一歩を進めて、漢字まじりの物語體となり、いよいよ、便利を加へたるにかかはらず、當時にありては、なほ、女文といはれて、朝廷の公文に用ひられざりしのみならず。鎌倉の、武力第一の時においてすら、政府の記録、および、裁判申渡は、拙劣なる文章生、または、僧侶の手を假りて、鴉のごとき漢文を用ひたりき。德川氏にいたりては、いかに。林道春は、東照公の命を奉じて、信長譜・秀吉譜を編述せしに、なほ、漢文を用ひたり。余が、最惜むところのものは、水戸義公の、大日本史を編纂せらるるにあたり、三宅觀瀾のごときは、國文を用ひむとの議を建てしかど、當時、多數の勢に制せられて、遂に、漢文を用ふるに至りしことにして、氣運の、いまだ、

至らざりしがためとはいへ、遺憾の事なり。おもふに、幕政三百年の間、文人輩出して、漢文の著述、すくなからざりしかど、帆足萬里は、「猿の狂言」なる一語をもて、これを冷評したるにあらずや。

もし、德川氏のはじめに當りて、一の豪傑ありて、漢文の、つひに、國語と、一致すべからざるを知りて、國文の體を一定し、公文に、歴史に、教育に、これを用ひしめたらむには、その間に生れたる俊才の士は、青年の精神氣力を、佶倔艱難なる漢文の修業に用ひずして、他の有用なる事業に用ひ、三百年の文運は駸々として、一層、高度の進歩に達したりしならむ。要するに、わが國民が、國文・國語における、固有の特性は、長き年月

の間、一種の事情のために發達を妨げられつつ、經過したりしは、歷史の證明する事實なり。（井上毅著梧陰存稿）

三、物まなびの心ばへ

昔は、皇國の學とて、ことにすることはなくて、唯、漢學をのみおけるほどに、世々を經るままに、古の事は、やうやうに、うとくのみなりもてきつつ、つひに、そのこころは、もはら、漢樣にうつりはてて、上つ代のことは、物の意は、更にもいはず、言葉だに、聞き知らぬ、異國のさへづりを聞くがごと、ものうとくぞなりにける。かくて、後に至りて、皇國の學をもはらとすることも、始りつれども、おか、漢意の、久しく、おみつきたる人心にしあれば、ただ、名のみこそ、皇國の學にはありけれ。いひと言ひ、思ひと思ふことは、猶、みな、漢にぞありけるを、みづからも、さはおぼえざるなめり。されば、近き世、まなびの道開けて、よろづ、さかしくなりぬるにつけても、なかなかに、その漢意のみ、深くさかりにはなりて、古の意は、いよいよ、はるかになむなりにけるを、此の近き頃になりてぞ、そこに心づきぬる人の出來そめて、世は、みな、漢なることをさとりて、人もわれも、古の意をたづぬる意の、明りそめぬる。おかすがに、神直毘・大直毘の神のましましける世は、なほ、ゆくさき、いと、賴もしくなむ。（本居宣長著玉かつま）

四、花くらべ

さまざまの遊戯あるが中に、昔、大宮人のせられけむ、花合になずらへて、花くらべといふ遊戯をものせむも、みやびたるわざなるべし。その方法は、まづ、十人の數なりと、假定すれば、これを、左五人、右五人と分ちて、別に、一人の判者を定む。さて、左右は、各、かはりたる、細きリボンを結びて、胸につけて、標とし、かねて、定めおきたる、一番・二番の番號の名を、呼ばるる毎に、左右より、各、このみの花の枝を持ちて、席上に出づ。かくて、各、その花の特所をいひて、劣らじ、負けじと、爭ふなり。かくて、左右の人の、そのいはむと欲するところのものを、いひ終りたる時、花は、かねて、定めある臺、又は、廣蓋の上に置く。判者

は、これを見て、批判の詞を下し、左を勝とか、右を勝とか定め、或は、左右、ともに、優劣なしと、認むる時は、持と定むる等の事もあるなり。その一二の例を、左に掲ぐべし。

一番、左、八重櫻

左方の人は、左の八重櫻を持ち出でて、判者の方に向ひて、座の中央に立つ。

右、牡丹花

右方の人、亦、右の牡丹花の枝を持ちいで、左方の人と、相ならびて、判者の方に向ひて立つ。

さて、左右、ともに、一禮すれば、左方の人は、右方の人に向ひて、曰はく、

我は、實に、櫻の花を愛す。櫻は、卽、我が國の名花にして、絶えて、外國に、この比を見ず。されば、こそ、歌にも、

敷島の、やまと心を、人とはば、
あさひに匂ふ、山ざくら花。

と、詠めれ、實に、うらうらと、長閑に、晴れ渡れる朝、高嶺に咲きにほひたる櫻の、旭日に匂へるは、何かは、これにおくものあらむ。まして、九重の殿の守と、えらび植ゑられたるも、此の上なき、花の名譽ならずや。いかに。

右方、また、誇りかに、牡丹の枝を指し示して、曰はく。

御身は、櫻を以つて、我が國の名花なり、外國に比類なしと、いはるれども、今、學問の道開けて見れば、外國にも、絶えて、

無しとは、いひがたし。況、その咲く時は、麗しけれど、嵐もまたで、心短く散るは、耐忍の力に乏しといはるる、我が民生の缺點にも似て、あまりに、面白からず思はる。それよりも、我が愛する牡丹花は、「花中の王」、「富貴の花」と、稱せらるる程ありて、その花輪の大なる、その枝ぶりの雅なる、實に見るからに、うち笑まるる心地して、いと、めでたからずや。されば、こそ、楊貴妃も、この花に、わが容姿を比べて、その美を誇れりと、いふ。さもあるべし。我は、櫻の、盛短からむよりも、廿日草と呼ばるる牡丹花の、盛久しきが、勝れりと、覺ゆ。いかに。

左方、曰はく、

御身は、牡丹の富貴なる名に迷ひて、我が國の名花を、おとしめ給へど、國を傾け、城を傾けたる妖婦楊貴妃が、顰にならひたるも、忌しからずや。まして、その香のうとましさ、餘りに、大きなる花のさまのこちたき、到底、櫻の、優美高尚なるに、比ぶべくもあらず。殊に、わが手折れる八重櫻は、伊勢の大輔が、

いにしへの、奈良の都の、八重櫻、
今日九重に、にほひぬるかな。

と、かしこき御前に奏せられたるも、面正しく、霞の間より、ほと、匂ひこぼれたる、紫の君によそへられたるも、なつかし。かくても、猶、牡丹花を、優れりと、爭ひ給ふか。

右方、なほ、曰はく、

おほけなくも、畏き御前わたりを引出でて、花にとりなし給ふは、卑劣ならずや。殊に、八重櫻は、一重の山櫻といふものよりも、更に、雅致なく、趣味なし。恰、店頭に賣ふ造花の簪の如く、紅粉、厚らかに粧ひたる田舍娘の如く、櫻は、八重に至りて、いよいよ、その價値を失ふものと、いふべし。我は、富貴の名に眩するにあらず。富貴の眞價を貴ぶなり。强兵も、また、富國ならざれば、能はず。强兵なるにあらざれば、何とて、國威を輝すことを得む。嗚呼、富貴、富貴。富貴の花。あかも、盛久しきは、まことに、深く、たのむに足るべし。

左方、曰はく、

然り。御身も、自、いへる如く、兵の強きは、何によるか。卽、將卒の、死を見ること歸するが如く、櫻の散りかた潔きが如きに、習へばなり。我が國の名花、櫻の心を以つて、武士の心とす。また、潔からずや。

かく、雙方、辯論終結する時、判者、立ちて、批判の詞を下して、曰はく、

大和心の、花に匂ひいでたる櫻、富貴の色に富める牡丹、その花のさまも、主の詞の文も、いづれをいづれと、優劣、更に、わきがたけれども、猶、判者が、古代なる心には、「花は櫻木、人は武士」とかやいひけむままに、君の爲、國の爲に、死をだにも辭せざる、日本男子の潔き働を、見聞くにつけても、猶、その基たるべき、富源造らむの心を、忘るゝにはあらねど、目の前の潔きがうれしさに、大和心の花を以つて、勝れりとは、定め置きてむ。「我が田に水」の誹も、いかがはせむ。

判者の批判終れば、左右、ともに、一禮して、勝の方の人は、臺の上にあげたる、我が八重櫻の枝と、負方の出したる牡丹の枝とを、持ち歸りて、かねて、用意しおきたる左方の花瓶にさし、右方勝ちたる時は、勿論、左方の出したる花を取りて、右方の花瓶にさすこと、左の如し。此の如くして、終結し、花の枝を、多く取りたる方を、勝方とす。（下田歌子著女子遊戯の栞）

五、交際と文學

凡、女子の交際するに當りて、最、缺乏を感ずるものは、話柄ならむかし。思ふに、男子は、外事を主るものなれば、おのづから、眼界ひろく、聞知することも、亦、多からむ。されども、女子は、家門を出づる機會も少く、たとひ、相當せる社會の業務に從事するものなりとも、その見聞の、男子に及ばざるは、事實なるを以つて、通例の女子は、談話、數刻に至らむか、忽、思想盡きて、いひ出づべき言の葉草はなかるべし。

これを以つて、女子の相會合するに當りては、その年齢若きものは、戯れて笑ふに止るか、さなくば、他人の身上を批評して、話柄となし、辛うじて、一座の興を維持する觀あり。されど、戯れて笑ふは、少女の時代には、許すべくとも、すでに、人の夫人とも呼ばるる時代に於いては、譽むべきわざならじ。まして、交際の話柄として、人を毀譽し、褒貶するがごときは、女德をそこなふこと、最、甚しきことなれば、固く、禁ずべきことにこそ。

然らば、いかにして、かかる缺點を補ふを得べき。蓋、話柄に窮するは、思想の豐ならざるに由るべければ、須らく、思想を養ふべし。さらば、自、高尚になるのみならず、雙方の益となるべき話柄、混々として、盡くることなかるべし。故に、今後、交際ちげき世に立ちて、口もて禍を買はざらむことを願ふ女子は、思想を富すばかり、必要なる事はあらじ。

交際上、樞要なる思想を養はむには、まづ、文學ををさむる

に若くはなし。卽、文學の趣味を積みて、以つて、衆人に向ふときの、話柄とすべし。抑〻、文學は、宇內の美妙を寫し、人情の韻致を載するものなれば、苟、文學思想あらむか、そのいふところ、高雅なるをもて、他人の感情を害することなかるべく、また、その語ることによりて、血あり、涙ある人たるを知るべければ、誰か、これに接して、ゆかしき思なからむ。わきて、春花・秋月の折につけても、その言、錦繡の色あり、その語、金玉の聲あるべし。などか、人の福を壽ぐに、辭を過らむ。人の憂を解くに、詞を失はむ。

又、文學の趣味ある人は、品性高きをもて、門地ひくく、財寶とぼしくとも、高位高官の人と、平等の交際を爲すことを得べし。また、その容貌、愚なるが如きものありとも、文學の德、內に積るものありて、おのづから、外に現れむには、忽、人をして、敬愛の情を起さしむるに足らむ。昔、成源僧正、連歌を好みければ、その山內の僧、ことごとく、その化を受けて、敷島の道を知りけり。一日、常在といふ僧、法勝寺の櫻のもとに佇みけるを、若き女房四五人、うちむれて、花を賞しけるが、この僧を見て、「かれも、人なみに、花見むとてあるにや」と、嘲りて、僧に向ひて、「この花一枝、折りて給べ」と、いひたりければ、この僧、うち案じて、

山がつは、をりこそたらね。櫻花、
さけば春かと、おもふばかりぞ。

といひかけけり。これを聞きて、さきに、笑ひつる女房ども、答ふること能はずして、驚きて、立ち去りけりとかや。かく、僧を笑ひしものをして、反りて、後の世の笑を招かしむるに至らしめしは、文學の蓄積ありしによりてなりけり。凡、萬山皆花の候とならば、定めて、三々五々、打ちむれて、花をながむる少女もあらむ。老婆もあらむ。果して、如何なる文學思想あるか。

茲に、注意すべきは、いかに、文學ある女子なりとも、われこそ風流なれと、いはむばかりの動作あるものは、眞の、文學趣味ある女子と、いふべからず。唯、一見して、表に、一丁字も知らざるが如き擧止あり、内に、文學の德をそなへたる、ゆかしき女子こそ望ましけれ。故に、交際に、文學を必要とするは、思想を養はむために止りて、文學を方便として、交際するが如きは、別事に屬すべし。もし、和歌を知らざる友にむかひて、三十一字の話を試み、雅言を解せざる人に對して、俗語を用ひざるが如きことあらば、反りて、人を恥ぢしむるに至るべし。最、戒むべきことにこそ。されば、おのれは、文學にて、心を養へと、いふのみ、文學を口に談ぜよとは、いはざるなり。（三輪田眞佐子著女訓の栞）

六、紫式部の碑文の補遺

紫式部のおくつきは、名にあひて、紫野にあれど、今は、ゐるしの樹だに朽ちて、いと、たどたどしうなりにたるを、松が浦

しま」ならねど、心あるあまの、なげきて、いしぶみに、事のこころ記してたてばやと、畑鶴山ぬしにはかる。ぬし、やがて、文をなして、もと末つばらに、述べたまへるは、めでたしとも、めでたきものから、惜むべきことの洩れたるあり。式部は、その父も、男ならざるを、くちをしと、いへるばかりの才ながら、ざえがりて、われはと、思ひあがれるは、をみなのあるまじき事とや、一といふ文字をだに、知らぬさまにもてなし、文よむことをば、召し使ふ者にもつつみし由、その日記に見えたるは、おのれをもて見れば、源氏の物語作れるよりも、尊く、世に、難きことにて、大かたの女にも、この心ばへを知らせまほしうぞ、思ふ。

その代には、才ある女、これかれ、きこゆるものから、口がしこく、ほこりかにて、さしもの學生をも、蔑にし、あるは、身をあだあだしうもてなすなども、また、そのざえを恃むからにこそと、はからるるを、このひとりのみ、年の寒きにあらはるる、松の操の、めづらかなるものかな。あはれ、この事を、むねと、記したまへかしとぞ、思ふ。「あれどもなきが如くす」と、きこえ、「馬の進まざるなり」と、答へしなども、たぐひなるを、そは、男にして、賢しと、いはるる人なり。女にしては、殊更に、たたへざらましや。仰がざらましや。

あられじと、霞にこもる、藤のはな、
なかなか深き、色ぞ見えける。（伴蒿蹊）

七、稅所敦子の君の棺前に誄す

嗚呼、稅所の刀自逝きぬ。我が無二の友たりし、掌侍正五位稅所敦子の君逝きぬ。忠孝慈貞なりし君が、前半世の行狀は、鹿兒島士民の、普く、知る所、其の後半世の名譽は、輦轂の下に、かくれなし。然れども、前後に通じて、善く、これを知り盡せるは、蓋、正風のみならむ。正風が、歌によりて、君と、始めて、相見しは、君が齡三十に垂とし、正風が年十八九の頃なりき。相見しは、歌によるといへども、仰ぎ慕ひしは、君が高節によりてなりき。

高節とは、何ぞ、君は、正風と、藩を同じくせし稅所篤之氏が

繼室となり、嬰兒を懷にして、不幸にも、夫に後れ給へりき。嗚呼、君は、京都にうまれ、京都にそだち、京都に結婚せし、優美艶麗の婦人なりき。當時、鹿兒島の風習たるや、同鄕人の外は、「よそ者」と呼びて、これを賤み、其の姑の如きすら、京女の到りて、同居せむ事を、快とせざりしにも拘らず、君は、正當の理に循ひ、みづから、奮ひて、遼遠、外國の如く思ひなされたりし、鹿兒島に赴き、其の姑に事へたりき。

嗚呼、尋常の女子ならむか、夫ありて、携へ歸らむとするにも、猶、難色あらむ。否、離婚を請ふにも至らむ。君が、己に克つ力強く、節操のすぐれたりしは、此の一事にても、知るべし。いはむや、京より齎しし所の衣服・調度の美なるものは、擧げて、これを、前妻の出にして、鹿兒島に在りし女に與へ、身には、粗弊を纏ひ、日夜、老いたる姑を看護し、其の酒を嗜むを見て、手づから、下物を調理し、口に適せしめしかば、嘗、君と同居するだに、快とせざりし姑も、未、月を累ねざるに、忽、君を、杖柱と、憑むに至りぬ。

國君順聖公、これを聞き、拔擢して、世子の保傅とし、親しく、君が行爲を視察して、大に、喜ばれ「吾、人を得たり」と、いはれき。

世子夭す。君、悲歎哀慕に堪へず、自刄して、殉せむとせり。姑、とりすがりて、泣いて曰はく、「吾、今、御身を失はば、何を樂に、此の世に生き殘るべき」と、君、これが爲に止む。

正風、嘗、君に就きて、歌談を聞く。訪ふ毎に、一婢ありて、君が傍を離れず。また、正風が詠草を返付せらるる毎に、必、正風が母、もしくは、姉にあてて送らる。當時、正風、其の、何故たるを解せざりき。今にして思へば、嫌疑を遠ざくる用意の、周到なりしなりけり。嗚呼、忠孝慈貞、誰か、これに加へむ。後、久光公の姫君の、近衞家に入輿せらるるや、侍して東上し、老女となる。其の下僚を遇する、慈愛に過ぐるものありき。

明治八年に至り、坤宮、女流の人才を徵し給ひぬ。正風、君を

薦む。君は、順聖公の恩に感激し、近衞家を去るに忍びず。正風、說くに、大義を以つてし、君、始めて、命を奉ぜり。爾來、兩陛下御文學の諸務を掌り、御製御歌の拜寫よりして、同僚女官の、百事の質疑に應ずるまで、日夜、安息に暇なかりき。

君、もと、蒲柳の質、たかも、公事に當りては、毫も、攝養を意とせず。往年、いたく、病む所あり。陛下、君が、年老いて、勤務の過度なるを憐み給ひ、家居して、適意に出仕する事を、許さむとたま給ひ、特に、正風を遣して、內旨を傳へしめ給ひしかど、君、安んずる事能はず。平素、厭嫌せし所の牛乳を服し、氣力を養ひ、病癒ゆるに及びて、なほ、君側に鞅掌せりき。

君、夙く、三寶に歸依して、慈善を好む事、飲食より甚しく、我が彰善會を起すや、熱心なる贊成者として、金員を寄附せらるる事、屢〻なりき。嗚呼、君が、八百年この方に、只、一人の文豪たりしことは、世人、皆、これを知る。去る一月五日、君、正風が病床を訪ひ、「明年、喜字の齡に達するをもて、みづから、賀せむとす」との言あり。正風、大に、これを贊し、盛大の宴を張り、朝野の詞藻を集めむと、期せしかども、全く、畫餅となりぬ。正風、今、かくの如く、忠孝貞慈なりし、無二の友を喪ひ、身、病褥に橫たはりて、葬場に會することをだに得ざるは、何等の慘ぞや。何等の痛ぞや。豈、慟哭せざるを得むや。疾を力めて、此の誄を草し、兒元彥をして、代讀せしむ。嗚呼、悲いかな。（高崎正風）

八、宮城御移轉の記

明治二十二年、一月十一日といふに、わが大君は、大御世の千代田の宮に、御わたましせさせ給へり。年ごろ、赤阪なる假宮に、よろづ、事そぎて、おはしましつるを、たかき・賤しき、心あるかぎり、かしこみ奉りて、あるは、たからを捧げ、あるは、宮木を運びて、とく、宮造りはてむことを、ねぎまつりしかど、上には、さしも、いそがせ給はず。ただ、國を富し、民を豐ならしめむことのみ、ひたぶるに、おもほしめしたるは、難波の宮の昔にも、立ちまさりて、いと、ありがたきわざになむ。

をかはあれど、海の外の國々と交りて、御國の光をかがやかすべき時にしあれば、百の司人たち、心をあはせて、おきて

行ひ、よろづの工匠ども、日に月に、怠なく、勉め勵みしほどに、二十一年十一月にいたりて、内外のかざりまでも、悉、ととのほりて、天つ日嗣のとこ宮と、定め給はむに、足らはぬことなく、なりにしかば、そがいたづきを、空しうせじとて、速に、うつろはせ給はむことを、おもほし立たせ給へるなるべし。

二日ばかり、さきだちて、まづ、賢所をわたし奉らせ給ふ。年は立ちぬれど、まだ、冬の末にしあれば、大かた、雪・霰がちなる頃ながら、この日は、空も、うららかに、霞みわたれる心ちして、神の御心も、ゆかせ給ふらむと、いと、たのもし。上・さいの宮にも、大庭におりたたせ給ひて、見たてまつり、送らせ給へり。御あとさきに、騎兵、あまた從ひ、式部職の人々、おごそかに、護

りたてまつりて、御くるま二つ、御唐櫃三つばかり、ひきつづき、渡らせ給ふ御さま、いと、かうがうしう、たふとし。

遷幸の日は、殊に、のどかにて、空には、塵ばかりの雲だに見えず。朝日、はなやかに、さし出でたるに、大御けしき、ひとしほ、うるはしう、御ふたところ、御車に召させ給へば、親王たち、大臣たちをはじめ、宮内官、數をつくして、御供仕うまつれり。樂隊の聲、いさましう、御門ひき出づるより、新宮に入らせ給ふまで、御道すがら、老いたる・若き・をとこ・女、山の如くにかさなりて、拜みたてまつる中にも、學校の生徒等は、ひとしほ、きよらに、裝ひつつ、御車の過ぎさせ給ふほど、君が代の唱歌をうたひて、祝ひ奉れるさま、いと、めでたし。十時すぐるころ、おはしましつきて、やがて、奉迎供奉の人々に、御對面あり。おのおの、いはひの大御酒たまはり、萬歳をよびかはす聲ども、いと、にぎはし。

かくて、少し、のどかになりぬる夕つ方、宮と共に、ここかしこ、御覽じわたしつつ、おのが、渡殿のほとりに、つい居たるを、「老人は、寒からぬところこそ、よかめれ」と、のたまはせて、飛香舍のおまし近う、座をたまはり、すびつをさへ、ゆるさせ給へる、御惠のほど、かしこしなどいふも、おろかなり。とし月、御あたり近う、仕うまつりて、御いつくしみを蒙りなれたる身にも、こたびの御言は、更に、忝さの、おきどころなき心ちするにつけて、この新宮どころ、とこしなへに榮え、この君が代、天地

と共に、久しうおはしまして、よろづの民を撫でいつくしませ給はむ事、この老人を、あはれませ給ふ如くならむことを、祈り奉るになむ。

うつります、千代田のみやの、宮柱、
動かぬ國の、もとゐなりけり。（稅所敦子）

九、福原の遷都

治承四年の水無月の頃、俄に、都うつりありき。いと、思の外なりしことなり。大かた、この京の始を聞けば、桓武の天皇の御時、都とさだまりにけるより後、すでに、數百歳を經たり。こゝなる故なくて、たやすく、改るべくもあらねば、これを、世の人、たやすからず、愁ひあへるさま、ことわりにも過ぎたり。されど、とかくいふかひなくて、御門よりはじめたてまつりて、大臣・公卿、悉、攝津の國福原の京に移り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰か、ひとり、故郷に殘り居らむ。官位に、おもひをかけ、主君の蔭をたのむ程の人は、一日なりとも、とく、移らむと、はげみあへり。時を失ひ、世にあまされて、期する所なき者は、うれひながら、留り居たり。軒をあらそひし人のすまひ、日を經つゝ、荒れ行く。家は、毀たれて、淀川に浮び、地は、目の前に、畠となる。人の心、皆、改りて、ただ、馬鞍をのみ重くし、牛車を用とする人なし。西・南海の所領をのみ願ひ、東・北國の莊園をば好まず。その時、おのづから、事のたよりありて、攝津の國、今の京に

到れり。所のありさまを見るに、その地、程せまくて、條里をわるに足らず。北は、山に傍ひて、高く、南は、海に近くて、下れり。波の音、常に、かまびすしくて、潮風、ことに、はげしく、内裏は、山の中なれば、かの木の丸殿も、かくやと、なかなか、やうかはりて、優なるかたもありき。日々に、毀ちて、川もせきあへず、運びくだす家は、いづくに作れるにかあらむ。猶、空しき地は、多く、造れる家は、すくなし。故郷は、既に、あれて、新都は、未、ならず。ありとしある人、みな、浮雲のおもひをなせり。元より、この所に居たる者は、地を失ひて愁ひ、今、うつり住む人は、土木の煩あることを歎く。道の邊を見れば、車に乘るべきは、馬に乘り、衣冠・布衣なるべきは、直垂を著たり。都のてぶり、忽に、改りて、ただ、

ひなびたる武士に異ならず。これは、世のみだるる兆とか、聞きおけるもあるく、日を經つつ、世の中、うき立ちて、人の心も、をさまらず。民の愁、つひに、空しからざりければ、同じき年の冬、なほ、この京にかへり給ひにき。されど、毀ちわたせりし家どもは、いかになりにけるにか。悉、もとのやうにも、造らず。

ほのかに、傳へ聞くに、いにしへの、かしこき御代には、あはれみをもて、國を治めたまふ。卽、御殿に、茅をふきて、軒をだにもととのへず。煙のともしきを見たまふときは、かぎりあるみつぎ物をさへ、ゆるされき。これ、民を惠み、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中のありさま、昔になずらへて、知りぬべし。（方丈記）

鴨長明

一〇、養和の飢饉

養和の頃かとよ。久しくなりて、たしかに、覺えず。二年が間、飢渴して、淺ましき事ありき。あるは、春・夏、日でり、あるは、秋・冬、大風・大水など、よからぬ事どもうちつづきて、五穀、ことごとく、みのらず。空しく、春耕し、夏植うるいとなみのみありて、秋刈り、冬收むるぞめきはなし。これによりて、國々の民、あるは地をすてて、境を出で、あるは、家を忘れて、山に住む。さまざまの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、さらに、そのゑるしなし。京のならひ、なにわざにつけても、みな、もとは、田舍をこそたのめるに、絶えて、のぼるものなければ、さ

のみやは、みさをも作りあへむ。念じわびつつ、物、かたはしより、すつるが如くすれども、更に、目みたつる人もなし。たまたま、換ふるものは、金を輕くし、粟を重くす。乞食、道のべに多く、うれひ悲む聲、耳にみてり。さきの年、かくの如く、からくして、暮れぬ。明くる年は、たちなほるべきかと、思ふに、あまさへ、えやみうちそひて、まさるやうに、跡かたなし。世の人、皆、うゑ死にければ、日を經つつ、きはまり行くさま、少水の魚のたとへに叶へり。はてには、笠うちき、足ひきつつみ、よろしき姿したる者、ひたすら、家ごとに、乞ひありく。かく、わびゑれたる者ども、ありくかと見れば、すなはち、たふれ死ぬ。ついひぢのつら、路頭に、うゑ死ぬる類は、かず知らず。とりすつるわざもなけ

れば、くさき香、世界にみちみちて、かはり行くかたちありさま、目もあてられぬ事多かり。いはむや、川原などには、馬車の行きちがふ道だにもなし。あやしきをづ山がつも、力つきて、薪にさへともしくなりゆけば、たのむかたなき人は、みづから、家をこぼちて、市に出でて賣るに、一人が持ち出でぬるあたひ、猶、一日が命を、ささふるにだに及ばずとぞ。あやしき事は、かかる薪の中に、丹つき、白がね・こがねの箔など、所々につきて見ゆる木のわれ、あひまじれり。これを尋ぬれば、すべき方なきものの、古寺に到りて、佛を盗み、堂の物の具を破り取りて、割りくだけるなりけり。濁悪の世にしも生れあひて、かかる心うきわざをなむ見たりし。又、いと、あはれなる事もあ

りき。さりがたき妻・夫など、持ちたる者は、その志まさりて深きは、かならず、先だちて、死にけり。その故は、わが身をば、次になして、夫にもあれ、妻にもあれ、いたはしく思ふかたに、たまたま、乞ひ得たる物を、先、ゆづるによりてなり。されば、父子ある者は、定れることにて、親ぞ、先だちて、死にける。また、母が、命盡きてふせるも知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸ひつきつつ、ふせるなどもありけり。仁和寺に、隆曉法印といふ人、かくをつつ、數をらず、死ぬることを悲みて、ひじりを、多、かたらひつつ、その首の見ゆるごとに、額に、阿の字を書きて、緣を結ばしむるわざをなむせられける。その人數を知らむとて、四・五、兩月がほど、かぞへたりければ、京の中、一條より

南、九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭、すべて、四萬餘なむありける。いはむや、その前後に死ぬるものも多く、川原・白川・西の京、もろもろの邊地などを加へていはば、際限もあるべからず。いかにいはむや、諸國七道をや。近くは、崇德院の御位の時、長承の頃かとよ。かかる例はありけりと聞けど、その世のありさまは知らず。まのあたり、いと、めづらかに、悲しかりし事なり。（方丈記）

一一、忘れがたみ　その一

實に、人は、はかなきものなり。今日の夜は、まだ、過ぎ去らざるに、ひたすらに、明日・明後日のことにのみ、とかく、心を移しがちにて、如何なる天の災が、すぐ、眼前に迫ればとて、一寸先は闇」の譬、明日ともいはず、今宵のうちに、深き淵瀨に陷る身とは、つゆ、ゐらずして、百年の計をなすこそあはれなれ。

風なく、雨なく、いと、靜なりし冬の夜は、忽にして、奈落の底を見るに至れり。

泣く者も、笑ふ者も、喜ぶ者も、怒れる者も、舞ふ者も、唄ふ者も、樂む者も、悲む者も、均しく、一度に、聞きたるは、地底に聞えし、大山の崩るるばかりの響なりけり。

すさまじき勢にて、大地は、下より突きあげられ、地上は、さながら、激浪の打つが如くに、震ひ動けり。

安政二年十月二日、時刻は、夜の亥の刻かとよ。地裂け、天墜

つるかと、驚かれたり。

見る見る、百萬の人家、倉庫・神社・佛閣、倒るるあり、崩るるあり、家にゐかれ、瓦にうたれて死せるは、幾許なるかを知らず。

一時に、落ち來る千萬の瓦、一時に、崩るる百萬の家の響は、泣き叫ぶ老若男女の聲に和して、たとふるにものあらざりけり。

暫にして、地の震、やや、をさまり、崩るる家の響、薄らぐに隨ひ、あとに殘りて聞えしは、親を呼ぶ子の聲なりけり、子を尋ぬる親の聲なりけり。

近くにも、遠くにも、殊に、あはれに聞えしは、次第次第に、細くなる、「助けてくれ、助けてくれ」の聲なりけり。

理なるかな、梁に壓さるる者あり、柱に挾まるる者あり、土に埋るるものあり、壁にゐかるる者ありて、さなきだに、苦む者は、多かりしに、地のふるひ動くこと、未、息むか、止まざるに、四方の天は、一面に、次第次第に、あかるくなりて、さながら、晝の如くになりしは、處々方々の潰家より、火は、炎々と、燃え出し、燄が、天を焦ししなり。

家に潰されて、身は動かず、悶え苦む、その處に、燃え來る火のために、煙に咽び、熱さに耐へかね、遁れむとして、あせれども、遁るることはかなはねば、聲をかぎりに、叫べども、助けに來る人はなく、無間の地獄、阿鼻の熱、無慚といふも、あまりありけり。

此の夜、わづかの時の間に、死したる人の、其の數は、幾萬なるかを知らざるが、中には、いとも、哀なる死樣の者も、多かりけり。

運強くして、不思議にも、其の身は、萬死を遁れしも、親・兄弟の無慚の死を、そぞろに、悲む者もありけり。

一二、忘れがたみ　その二

これ等は、人の身の上なり。我にも、此の夜の話あり。父は、此の夜は、宿直の番にて、家を守り、三人の子を護りしは、母なりけるが、上なる子二人は、母の左右に寢ね、末なるは、乳母に抱かれて、枕邊に臥し居たりき。

あるまじき事なれども、「すは、地震よ」と、いふとひとしく、乳母は、抱きし子を捨てて、我のみ、外へと、逃げ出でたり。

母は、啼く子を抱きあげ、右と左に寢たる子を、ゆり起さむと、あせりしかど、稚子をかかへし身にて、大浪にゆらるる如く、動きつつ、片手に起す、左右の子は、冬の夜の、寢入りばなにて、起せども、起せども、いつかな、いつかな、起くればこそ。うつつにて、母に連れられて、外へ出でたる、其の時は、地のゆるるのも、やみしあとにて、四方の天は、火事の爲に、既に、眞赤になり居りたり。

實に、危かりしは、我々親子の命なりけり。そも、安政の地震には、水地なる舊家の、潰れぬものは稀なりしが、我等が住ひ

しふる家も、潰れぬばかりに、傾きたり。

今において想ひおこすも、身の毛のよだつは、此の夜のことなり。此の地震にて、我等が家の、もしや、潰れもたらむには、我が兄弟は、死したりとも、誰をも、恨むべきならねど、もし、母が死したらむには、我等が罪にてありたるならむ。

さりながら、此の夜、もし、我等親子が死したらば、何故、母が死せしかは、世に、知る人はなかりしならむ。生くべかりしを、子の爲に死せりとは、誰か知るべき。

今も、なほ、忘れざるは、久しき昔の、此の夜のことなり。實に、ありがたきものは、母の愛なり。母は、其の身の危をも顧みずして、一心に、子を助けむと、爲ししものなり。

實に、深きは、親の恩なり。我に、今日あるは、かかる愛を以つて育てくれたる、母ありたるが爲なり。我は、自、知らざれども、我が母が、此の夜の如くに、其の身の命の危きをも顧みずして、我々の身をば、護りくれたるは、幾度なりしか、知れざるならむ。

此の夜のことは、亡き母の、我には、忘れがたみなり。此の夜、我々親子より、運拙くして、死せる者には、助かるべきを、子の故に死したる母は、幾許なるらむ。

此の夜のことは、亡き母の、我には、忘れがたみなり。此の夜の如き天災の、もし、今日の夜に起らむには、助かる命を、子のために、棄てむとする母親は、幾許なるか、知れざるならむ。實

に、深きは、親の恩なり。忘れ難きは、母の愛なり。(外山正一)

一三、家範

漢ノ緹縈、上書シテ、以ッテ、父ノ罪ヲ贖ヒ、文帝、遂ニ、肉刑ヲ除キ給ヒキ。一言ニシテ、而モ善ナレバ、天下、其ノ澤ヲ蒙リ、後世、其ノ福ニ賴ル。及ブ所、遠キカナ。

人ノ、其ノ子ヲ愛スル者、多クハ、「兒幼ニシテ、未、知ルコトアラザルノミ。其ノ長ズルヲ俟チテ、之ヲ教ヘン」ト、イフ。コレ、猶、惡木ノ萌芽ヲ養ヒ、ソノ合抱ナルヲ俟チテ、之ヲ伐ラント、イフガ如シ。ソノ力ヲ用フルコト、顧フニ、多カラズヤ。又、籠ヲ開キテ、鳥ヲ放チ、而シテ之ヲ捕ヘ、韁ヲ解キテ、馬ヲ放チ、而シテ之ヲ逐ハンガ如シ。曷ゾ、縱ッコトナク、解クコトナキガ、易シト爲スニ若カンヤ。

人ノ母タル者ハ、慈ナラザルヲ患ヘズ、愛スルコトノミヲ知リテ、而モ、教フルコトヲ知ラザルヲ患フ。古人、言ヘルコトアリ。「慈母ハ子ヲ敗フ」ト、愛シテ教ヘズ、不肖ニ淪ミ、大惡ニ陷リ、刑辟ニ入リ、亂亡ニ歸セシムルハ、他人、コレヲ敗フニアラズ、母、コレヲ敗フナリ。古ヨリ今ニ及ブマデ、是ノ若キ者、多シ。悉、數フベカラズ。

魯ノ師春姜、ソノ女ヲ嫁セシメツルニ、三タビ往キテ、三タビ逐ハレヌ。春姜、ソノ故ヲ問ヒシニ、其ノ室人ヲ輕侮スルヲ以ッテナリキ。春姜、ソノ女ヲ召シテ、之ヲ責メテ曰ハク、「ソレ、

婦人ハ、順從ヲ以ッテ務ト爲シ、貞懿ヲ首ト爲ス。今、爾、驕溢不遜ニシテ、以ッテ逐ハレ、曾、前過ヲ悔イズ。吾、汝ニ告ゲシコト、數、ナリキ。而ルニ、吾ヲ用ヒズ。爾ハ、吾ガ子ニアラザルナリ」ト、之ヲ笞スルコト百、之ヲ留ムルコト三年ニシテ、乃、マタ、コレヲ嫁セシメシカバ、女、節義ヲ奉守シ、終ニ、人ノ婦タル道ヲ知リキトゾ。今ノ母タル者、女ノ、イマダ、嫁セザルトキニハ、之ヲ誨フルコト能ハズ。既ニ、嫁シヌレバ、之ガ援ヲ爲シ、己ヲ挾ンデ、以ッテ、ソノ壻家ヲ凌ガシム。棄逐セラルルニ及ビテハ、則、壻家ト鬪訟シ、終ニ、自、ソノ女ノ令カラザルヲ責メズ。師春姜ノ如キハ、豈、賢母ニアラズヤ。(司馬温公)

一四、徳川溶姫

前田家十三代、加賀守齊泰卿の室、溶姫君と聞えしは、徳川十一代將軍太政大臣家齊公の御女におはしき。此の君、みめかたちうるはしう、はた、幼きより、いと、賢くて、絲竹の調は、いふも更なり。大和唐土の文の林にも、深く分け入り給ひ、敷島の道にも、たどたどしからず、おはしきとなむ。されば、齊泰卿との御中は、はやく、さる御契ありしのみにて、いまだ、御入輿もおはせず、殿は、金澤の城にぞ、住み給ひし。夏の頃、五月雨の、うち續きて、晴間なく、つれづれなる日、いと、なつかしさに、細やかなる御消息ありて、奥に、

君があたり、音づれゆかば、郭公、

まつにねぬ夜の、物がたりせよ。

と、御手も、ゆゑゆゑしう、ほのかなる御墨つきの、薄く濃く、書きまぎらはし給へるを、奉り給ひければ、殿も、いたう、めで給ひきとぞ。

かかれば、御入輿の後は、ますます、水も漏さぬ御中らひにて、めでたくおはしき。一日、御鷹狩より、歸らせ給ひしをり、常は、御玄關より入り給ふに、此の日、殊更に、奥庭へ廻り給ひ、常のおましの簀子に、腰うちかけて、洗足めされければ、姫君、やがて、出で迎へ給ひ、やをら、砌の石に、おりたち給ひ、御手づから、御わらぐつの紐を解き、御足をきよめなど、せさせ給ひしさま、いとも、尊く、めでたくおはしましきと、亡き我が父が、親

しく、見奉りしを、いみじう、感じつつ、常に、物語られき。

まことや、其の頃、德川家は、彌盛にて、木草も靡かぬはあるまじく、時めき給ひたれば、その家の子どもは、たけだけしう、うけばりつつ、ともすれば、無禮のふるまひも見えつるを、この姫君の、めしつれ給ひし女房など、かりそめにても、さる擧動の見ゆる折は、いたう、制し給ひきとぞ。

あはれ、世の人々よ。たとひ、品高く生ひいでて、我が里より、劣れる家に嫁ぎたりとも、ゆめゆめ、夫をかろしむるなどの心おごりは、あるまじきわざぞかし。つゆばかりも、高ぶる心のあらむには、いかに、姿はうるはしう、手には、如何なる能ありとも、見おとりせらるるならひぞかし。されば、誰も誰も、此

の姫君のごとくこそ、あらまほしけれ。（小川直子著進話錄）

一五、人の妻

人の妻たらむものは、よく、夫を慰めて、其の心のむすぼれを解き、其の心のいさみを添へ、内を顧みる煩なく、外に向ひて、働き得るやうなすべしと、いふ。これ、ひとわたりの言なり。昔は、それのみにても、足りぬべし。今は、世も進みて、男の、みづから立つさまも、いたく、異なれば、女の心得も、それのみにて、足るべからず。

妻にありたきは、夫の業を、夫のみの業と思はで、夫の業、やがて、我が業なりと、常々、思ひゐみてあらむ心なり。固より、夫の畫作る傍にありて、夫の海を畫けるに、船を畫き添へ、夫の弓ひく後に立ちて、夫の弦持つ手を曳けと、いふにはあらず。唯、夫の業を、よそ事のやうに、思ひ居らざれと、いふ事なり。

昔、ある人、佛の敎を嫌ひて、そを說き破らむことを、おのが願とゐけるに、其の妻、わが夫に向ひて、「君、まことに、佛の敎を破りこぼたむと、思ひたまはば、まづ、佛の敎を、よくよく、究めたまひて後、如何やうにも、精く、如何やうにも、强く、あげつらひ給へ。はやりて、そぞろ言ゐたまはむは、悔あるべし」と、いひければ、男も、尤なりと、うなづきけりと、いふ。

人の妻にありたきは、この女の心がけなり。我が邦の作物語・芝居などを見れば、弓箭の家に生れたる男の、事ありて、戰

の場に出でむとするに當り、その妻の、泣きて、別を惜み、鎧の袖、太刀の鐺に縋りつきて、引きとどむるやうなるは、多けれど、我が夫を勵し立てて、快く、門出さするやうなるは、少し。女といへば、いづれも、皆、夫の身をのみ愛して、夫の業をば、重んずることなし。これ、皆、人の妻となりながら、夫の業は、やがて、我が業なりといふ、心がけ足らぬより、出づることなり。口惜しと、いふべし。

出陣の獻立には、勝つといふにちなみて、搗栗を用ひ、擊つといふに因みて、打鰒を用ふるなど、我が邦のさだめ、まことに、よし。さるに、その武夫の妻ともあらむもの、別を惜みて、泣きくづをるるが如きは、其の情、一わたりは、さることながら、よく思へば、心淺くて、夫を愛する思も、薄きに似たりと、いふべし。

人の妻にありたきは、夫の業、やがて、我が業なりと、思ひたみてあらむ心がけなり。（幸田成行著讃言）

一六、荒木田麗女

上下三千年間の女中について、文學者と稱すべき者を求めば、紫式部・清少納言を首として、次々に、數ふ可き者、少からず。されど、女中に、修史家ありやと、いはば、これと、答へて、擧ぐべき者は、幾人もなし。余が管見の及ぶ所は、伊勢の荒木田氏一人のみならむ。

荒木田氏は、伊勢の神官正四位下荒木田武遇が女にして、名は麗といひ、號は清渚といへり。山田の御師慶德三郎大夫、名は雅、號は如松といふ者の妻となれり。此の人、文學の才あり、特に、國文に通じ、和歌を善くし、博覽にして、讀まざるものなく、最、史學に、心を用ひたり。大鏡の體にならひ、高倉帝安德帝、二代の事を記して、月の行方二卷を著す。彌世繼の、今の世に失せたるを、補はむとなり。後、又、增鏡の次を、慶長まで、書きつづけて、池の藻屑十四卷を著せり。元弘より後、凡、二百八十年が間の御代御代を、大事漏さず、辭、亦、流暢にして、簡要を擧げたる手段、實に、すぐれたるものなり。まして、大日本史、野史などの全史、いまだ、世に顯れぬ時にて、且、史料の、殊に、繁蕪な

る時代なるに、取捨編纂の勞、いかに、難かりつらむと、覺ゆ。

されど、其の跋語によれば、月の行方は、某年七月七日に書きはじめて、八月十五日に終り、池の藻屑は、明和八年正月朔日よりはじめて、二月十五日に終れりと、記せり。かく、十餘卷の國史を、一個月半に成功せしは、新井白石先生の藩翰譜の外には、聞きも及ばず。文筆の敏捷なる事、想ひやるべし。されば、積年の著述、甚、多く、清水濱臣翁が、見たりとて、記ししもののみにても、彼の二史の外に、尙、十一種ありきとぞ。

又、清水氏の記によれば、此の人、氣高き性質にて、一見識を立てて、當時、伊勢には、本居宣長、荒木田久老等の諸家、盛に、國學を唱へて、古史、歌文の道を講じたれば、同じ道とて、就いて

問ふべきはずなるに、曾、これには、從ふ事なし。友とする所は、却りて、漢學の儒者のみにて、龍公美・野公臺・江村北海などの人々なりき。かかる本性なれば、おのづから、人を人ともせぬ氣質にかと、おもふに、却りて、謙遜にして、人に傲ることなかりき。

かく、文學に勝れたるは、婦人の職たる、縫織の事には、劣れる所あらむと、見れば、これ、亦、大に、すぐれたりと、いへり。江村北海が記せるものに、「幼にして穎悟、保姆の訓戒を俟たずして、婉娩聽從なり。組衽裁縫を始として、諸の女工、精妙ならざるはなし。中饋の暇には、讀書に從事して、見聞、愈〻博し」と、書けり。尙、證據とすべきは、龍草廬の詩集に、「伊勢の慶君の內子荒木田氏、みづから、一綿布を製し、手づから、蠻樣の花文を繡刺し、且、新詩一章を附けて惠まる。詩といひ、繡といひ、絢爛、目を奪ふ。殆、塵寰中の女巧にあらず。稱嘆のあまり、其の韻を次ぎて、厚意を謝す」と、いへる詞あり。これにて、女工のすぐれたることも知らる。

夫の如松も、學を好みて、古に通じたれば、夫妻、相對して、學問を樂み、相携へて、五畿內を漫遊し、諸名家を訪ひて、唱酬したる事もありとぞ。されば、琴瑟、よく調ひて、貞淑の美德も、備れりと、見ゆ。實に、たぐひ稀なる人と、いふべし。今も、山田の八日市場といふには、其の家ありと、聞けり。（萩野由之）

一七、平氏の都落

このごろ、都の外は、いよいよ、亂れ增れりと、聞ゆれば、卯月には、惟盛の中將をはじめ、平家の殿原、十萬の軍を帥ゐて、義仲を討たむとて、越路に向ひ給へり。去年も、通盛の中將下り給ひしかど、はかばかしからでぞ、歸り給ひにし。五月、そなたざまに、戰はじまれりとて、大方、都の中も、靜ならず。所々に、幣使も立つめり。山々寺々にて、御祈、かずかずに、つかうまつらせ給へり。越路よりは、使、ひまなう、通ひ參るに、心ゆるびせらるる折もあり。又、胸つぶるる事もありて、京に居給ふ平家の殿原も、北の空を望みて、ゐづ心もなう、おぼしたり。はじめは、官軍まさりぬるよし聞えしが、終に、うちまけつとて、中將、其の外の人々、辛うじて、歸り上り給ふ。京出で給ひし程は、雲霞と、野山にたなびきつる兵も、所々にて、亡びつつ、殘りぬるは、いと、はつかなり。內にも、きこしめし驚く。大殿も、いかにせましと、さわがせ給ふ。宗盛などの平家の人々も、ゐばしは、あきれ給ひけるが、さて、打捨てむやはとて、こたびは、知盛の中納言、重衡の中將、資盛の中將、貞能などを、つかはし給はむとす。新中納言と、三位中將は、勢多より、左の中將と、筑後の前司は、宇治路よりと定めて、文月廿一日、都を出で給ふとぞ聞ゆる。

又、山に、使をやりて、衆徒ども、公の御方に參るべく、さらば、今より、日吉の社を、藤氏の春日の社になぞらへ、延曆寺を、山階寺のためしに、平家の、氏の社、氏寺になし聞えて、ながく、尊

び奉るべきよし、前の内大臣をはじめ、平氏の、むねとある人人、ひとつ心に、名を連ねて、文こまやかに、かい給へり。大衆も、いなみがたく、いかになど、いひかはせど、義仲も、懇に、聞ゆる事あればなむ、やがて、そなたになびきて、京には、返事も奉らず。義仲は、そこばくの軍を從へ、いかめしき勢にて、近江路より、坂本に到り、大衆のゐるべするままに、山にのぼりぬと、聞えしかば、都の中、いみじう、さわがしうなりて、人々は、唯、物にあたりつつ、あわてまどひたり。五條わたりに住むばかりの、下が下なる者共さへ、恐ろしき事に思ひて、野山の末にも、身を隱してむとてかなしと思へる妻子など、引きつれ、あるは、老いたる親を扶けて、あくがれさまよふ程、大路のさまも、いとらうがはしく、俄に、あさましき世となりぬるぞ、せむかたなき。

一、院さへ、忍びて、山に御幸あり。攝政殿、又、慕ひて、參らせ給ふ。平家は、さりともと思ひし、山の大衆も、源氏に語らひとられぬるが、心やましう、今は、都に堪へがたく見えければ、内をも、院をも、具し奉り、ゐばし、福原にうつろひなむと、思ひ立ちけるに、院は、いつしか、忍びて、出でさせ給ひきと、聞ゆれば、いと、ほいなくて、行幸ばかりを催し奉り、三種のおほん寶をも、ゐて奉り、玄上・鈴鹿などの、代々の御物、殿上の御倚子・時の簡、さらぬも、かずかずに、とり具して、上も、御車に奉り、何の儀式もなくて、出でさせ給ふ。女院・二位殿・ゐぞくの殿原、みな、行幸

におくれじと、いそぎ給ふほど、いひあらず、らうがはしく、唯今、あたのよせ來らむやうに、女房・幼き人々の、泣きまどひたるも、あわただしげなり。大臣・中納言たちなどは、うへをも、御子達をも、いざなひ奉り給へど、さならぬは、とどめ置き給へるもあれば、見捨てがたく、出でがてなるほど、いはむ方なう、哀なる事のみにて、一人、心づよきもおはせず。唯、夢路にまどふ思にて、我にもあらぬ御さまどもなり。

惟盛の中將は、とりわきて、心苦しう、おぼしたり。此の北方は、昔の成親の大納言の御女にて、年頃、わく方なう、互に、淺からず、思ひかはして、君達も、うつくしげなる、持ち奉り給へば、いよいよ、あはれなる契、愚ならず。女君は、父の大納言、淺ましうて、失せ給ひしこなたは、心ぼそきやうなれど、男君の、かひがひしう、物し給ふに、うしろ安くて、ひたすらに、うち頼み給へる、心ばへも、らうたければ、男君、我が身こそあれ、此の人々をさへ、ゆくへなき波路の末に、漂しなむ事の、いと、あたらしう、びんなくて、留め奉りつつ、心にもあらで、ふり捨て給へるを、女君は、恨めしう、いかならむ岩ほの中にも」と、慕ひ聞え給へり。中將、ことわりに、見きこえ給ひ、「さらぬ鏡の」と、こしらへ給へど、我も、心のみ、かきくらされて、出でもやり給はず。兄弟の殿原、馬ひき立て、そそのかし奉り給へば、なかなか、かへり見がちにて、出で給ふ。

經正の君は、年頃、なれつかうまつりし名殘も、忘れがたく

て、仁和寺の宮に、御いとま聞えむとて、まうで給へり。人々、都を出で給へば、やがて、家々に、火をさして、燒きあげたり。保元よりこなた、二十年に餘りて、住みなれし故郷も、今日を限と、覺ゆる心ちどもには、「いとど深草」とのみ思ひて、行きもやられ給はず。忠度、

ふるさとを、燒野の原に、かへり見て、
するもけぶりの、波路をぞゆく。

と、のたまふを聞きて、經盛、

はかなしや。ぬしは雲ゐに、別るれど、
宿はけぶりと、立ちのぼるかな。

行盛の左馬頭は、都出づる程、あわただしけれど、日頃、よみおきたまへる歌どもを、定家の君のもとに、つかはすとて、つつみ紙に、

流れての、名だにもとまれ。ゆく水の、
あはれはかなく、身は消えぬとも、

後の代の撰集に入りて侍るをば、いかに、なきかげも、本意ありて、うれしうこそ見給はめと、いと、あはれになむ。

かう、とりどりに、いそぎ出で給ひけるに、池の大納言ばかりは、京に殘り給ひ。東より、かねて、頼朝の、聞えおこせつる事ありてとぞ。又、平氏ならぬは、上達部・殿上人・大臣達まで、行幸にも仕う奉り給はず。皆、とどまり給へば、院の上、山におはしますと、聞きて、引きつれ、參り給へり。かく、あわただしかり

しは、文月廿五日なりけり。（月のゆくへ）

一八、戊辰の昔譚の一節

十六日の頃にやありけむ、落人は、皆、若松のほとりに、あつめらるる事となりたれば、又、この里をいで行きぬ。過ぎゆく道のをかしき山に、紅葉の色、いと、うるはしきが、常磐木のひまより、ほの見ゆるあり。又、何の林にか、皆、一つらに、朽葉の色ゐたるなど、とりどりに、おもしろく、緑地錦の山、黄纈纈の林など、ことふりにたれど、外に、いふべき言葉もおぼえず。ただならむには、ゆき過ぎましやと、思ふに、ゐばしいこふだに、心にまかせぬぞ、口惜しきや。柳津といふ所を過ぐるに、いと、高き處に、目にたつ寺ありて、人にとへば、ここにて名高き、虚空藏なりと、いふ。程近ければとて、詣づるに、その石段は、築きしものならず、おのづからなる、大なるいはほを、削りなしたるにて、いと、めづらしきものなりけり。下を流るる、只見川にのぞめる所は、遠方も見やられて、眺望、いと、よし。この菩薩の、世に知らるるごとく、大悲利他不盡なること、天の如く、諸願をみたすものならむには、おのれごとき者のねがひも、入れ給はむとて、

我もいざ、思ふねぎごと、いれて行かむ。

虚空藏なる、名にし立てれば。

後にきけば、わがよぎりしより、日數も經で、この處にて、烈し

き戰ありて、疊などあげて、楯となして、拒ぎぬとぞ。いかに、あさましき樣となりにけむ。

ゆきゆきて、十九日に、高田に著きぬ。ここは、若松より、二里ばかりはなれ、川一筋隔てし處にて、守より仰ありたりとて、いみじう、もてなされ、「落人の身に、ふさはしからず。空おそろし」など、いひて、暮しぬ。

ある日、外の方、さわがしければ、甲・乙二人は、刀ひさげて、走り出でしが、やがて、かへれるに、何事ぞと、問へば、「この若松の、やうやう、安からぬさまと、なりゆくを厭ひてにや、逃れむとする兵あるを、所の百姓ども、いたく、怒りて、敏鎌・竹鎗など、えものえものを持ち集りて、皆、つき殺すなり。かしこの川ばたには、首さらしたるあり、この溝には、あまた傷うけて、まだ、うごめき居るあり」など、いへど、恐ろしければ、出でても見ず。

かくて、二十三日となりぬ。人々の物語に、我がせの君は、守の御供して、若松に居たまふと、聞き、さらば、今日、ひる過ぎなば、行きてまみえむと、子供らに語れば、いみじう、喜ぶ。朝げ終りて、少しにても、寒さの心がまへにと、衣ときはじめしに、家のはしため、あわただしく、階のぼりきて、今日は、何となく、城の方、物さわがしければ、包など、取揃へて置き給へと、いはれ、さはとて、解きかけし衣、そのままおしまろめ、とりかたづくるに、程なく、筒の音とどろき渡りて、すさまじく、ひるの頃となれば、はや、遁れくる人、いと、多し。そのさま、さまざまなる中

に、いたく、老いたれど、よしありげなる女の、下部の背に負はれ、あとより、長刀もちたる下部のつづけるあり、また、うら若き女の、黑髪ふりみだし、白き鉢巻し、うるはしき衣、りりしく、高からげして、さやはづしたる長刀かいこみ、走り來れるなどは、いと、目ざましかりき。いと、あわただしき折なるべきに、女は、皆、うるはしく、けはひし居たるは、そのたしなみの程、思ひやられて、いと、ゆかしうおぼえぬ。

かねて、川一筋ありと、聞きしが、かかる折とて、舟もとはぬにや、かち渡たりとおぼしく、もすそ、ぬぼるばかりなる人もありき。かかれば、このほとりは、人宿すやうなるさまならねば、いづくともなく、まよひ出でぬ。

丸木ぶね、よるべの岸に、風たちて、
ただよふ末や、いづこなるらむ。

いかにせむ。尋ね尋ねて、今日こそは、
君にあひ津も、そらだのめにて、

今は、米澤へと、思へど、坂下の路、え行きがたしと、いへば、一まづ、ひきかへして、荻のくぼといふ所に來るに、日も、やうやう、夕暮となりたれば、やどりもとむるに、若松やぶれたらむには、そこの落人ならば、ともかくも、他藩の人をば、いかで、やどさるべきとて、いづくの家にても、うけひかず。くれ過ぎて、ある古寺に入りて、せちに、賴みきこゆるに、住職、ただ一人にて、ここも、他藩の人、宿すべきならねど、人救ふがつとめなれ

ば、ちひて、いなまむも、情知らぬに似たり。今宵一夜はと、ゆるさるるに、いと、嬉しく、足すすぎて、入りぬ。さすがに、出家の、情ありて、かにかくと、心してもてなされぬ。ここより、若松のかた眺むれば、ほのほ、ここかしこに起り、ことに、會津の菩提寺にて、天王寺とやらむいふは、高き處にありて、めでたき伽藍なりしが、今、さかりに、燃え上るさま、誠に、咸陽宮の烟もかくやと、思はれて、其のすさまじさ、物にも似ず。さながら、眞晝のやうに、かがやきぬ。（小金井きみ子）

一九、野末の伏屋（天町芳衛）

ありし昔べ、　ゆめに見て、

うつつに返る、　草のとこ、
おくや思の、　露ちげく、
たもとに月も、　やどるなり。
親のかたみと、　身にまとふ、
衣はやれて、　肌さむく、
花のかほばせ、　色あせて、
懸るもつらし、　みだれ髪。
うき世の人に、　捨てられて、
宿とさだめむ、　家もなく、
たよる方なき、　身のうへは、
月かげのみや、　てらすらむ。

むかしは父の、　家に來て、
朝夕はべりし、　ひとびとの、
たまさか道に、　遇ひぬれど、
見知らぬ顔に、　過ぐるなり。
そのかみ母の、　もとに來て、
我が身をほめし、　ひとびとの、
見る影もなき、　うしろより、
およびをさして、　わらふなり。
氷よりなほ、　冷やかに、
人のこころは、　なりはてて、
塵にけがれし、　まなこには、

清きなみだも、　涸れにけり。
月はくまなく、　てらせども、
ひとりの秋の、　ここちして、
我が身につらき、　世のなかは、
夢路ばかりぞ、　のどかなる。
なみだの川に、　ゑづむ身を、
神よすくはせ、　たまひてよ。
天つみくにの、　玉どこに、
召させ賜へや。　いざはやく、
おく露つらき、　草むらに、
うちもわびぬる、　こほろぎの、

鳴く音もいとど、　身にあみて、
うき世に秋は、　更けにけり。

塵のちまたに、　住む人の、
夢まどかなる、　さ夜なかに、

野末のふせ屋、　風あれて、
村雨すごく、　そそぐなり。

二〇、和歌の感興

古今集の歌は、詞すなほに、餘情ありて、おほくは、一唱三歎の價あり。

百千鳥、さへづる春は、ものごとに、
あらたまれども、我ぞふりゆく。

この歌を吟ずれば、「老人懷舊」の情を感ずべし。

春の夜の、やみはあやなし、梅の花、
色こそ見えね、香やはかくるる。

この歌を吟ずれば、「有德不可揜」の誠を感ずべし。

世の中に、さらぬ別の、なくもがな。
千代もといのる、人の子のため。

この歌を吟ずれば、「孝子愛親」の情を感ずべし。

忘れては、夢かとぞ思ふ、思ひきや。
雪ふみわけて、きみを見むとは、

この歌を吟ずれば、君子不忘故舊の情を感ずべし。

この類、外にも、なほ、多かるべし。古今集以後、八代集に至りては、あげて數ふべからず。中に、翁が、常に、好みて、吟ずる歌、一首あり。そは、實朝の歌なり。

武士の、矢並つくろふ、籠手の上に、
あられたばしる、那須のゝの原。

この歌を、定家卿、評して、「鬼をとりひしぐ體」と、いはれたりとぞ。誠に、勇壯をもてすぐれたる歌なり。外には、この體の歌、おほく、見えず。

さて、春秋のあはれをいひ、月花などを詠めし歌も、ただ、其のままに、寫し取りて、さながら、見るやうにあるは、かの、詞つづき巧に、よく、いひかなへたりと、見ゆるよりは、感深うして、

棄てがたく覺ゆ。

ひさかたの、光のどけき、春の日に、
ゝづごころなく、花の散るらむ。

うちゝめり、あやめぞかをる。郭公、
鳴くやさつきの、雨のゆふぐれ。

庭の面は、まだかわかぬに、夕立の、
そらさりげなく、出づる月かな。

ゆふされば、門田の稻葉、音づれて、
あしのまろやに、秋かぜぞ吹く。

秋風に、たなびく雲の、たえまより、
もれ出づる月の、影のさやけさ。

駒とめて、袖うちはらふ、陰もなし。
佐野のわたりの、雪のゆふぐれ。

これらの歌、いづれも、その景色を寫して、さながら、目に見るが如し。折にふれて、これを歌はむには、襟懷を清くし、塵想もけぬべし。西行は「わが佛法は、倭歌によりて進む」と、いへり。わがともがらも、吟詠をたすけ、性情を養ふには、便なきにあらず。倭歌の捨て難きは、實に、ここにあるなり。（室鳩巣著駿臺雜話）

二一、平忠度と藤原俊成

薩摩守忠度は、いづくよりか、歸り來られけむ。士五騎、童一人、召し具して、五條の三位俊成卿の許にたち寄りて、門を、ほとほとと、うち叩き、「忠度と申す者が、歸り入りて候ふ。門をな開かれ候ひそ。この際まで、立ち寄らせ給へ」と、申されたりければ、三位、「さる事あり。その人ならば、苦しかるまじ。入れ申せ」とて、門を開きて、入れ給ひ、對面あり。

忠度のその日の裝束には、紺地の錦の直垂に、小具足ばかりをぞ給ひたりけるが、事の體、何となく、もの哀なりけり。薩摩守、申されけるは、「年來、申し承り候ひし後は、疎にも思ひまゐらすることは候はねども、この兩三年は、京都のさわぎ、國國の亂、偏に、當家の身の上にて候ふ間、疎略を存ぜずとは、申しながら、常には、まゐりよることも候はず。抑、勅撰のあるべき由、承り候ひしに、世のみだれ出で來候ひて、その沙汰なく

候ふ。一身のなげきと、存ずるに候ふ。君、既に、都を出でさせ給ふ上は、今は、野邊に屍を晒さむずるより外は候はず。もし、世鎭りて後、勅撰の沙汰候はば、この中に、さりぬべきもの候はば、一首なりとも、御恩を蒙り、草の蔭にても、嬉しと、思ひ奉り候はば、遠き御守とこそなり參らせ候はむずれ」とて、鎧直垂の袖より、卷物を、一つ、取り出し、俊成卿に奉らる。三位、開き見給へば、百首の歌を書かれたり。

三位、今に始めぬ御事とは、申しながら、かかる急劇の中に、思しめし忘れぬ御志、ありがたく存じ候ふ。勅撰の事においては、愚臣が承り候ひぬれば、向後、その沙汰候はば、疎略を存ずべからず」と、宣ひければ、薩摩守、大に、喜びたまひて、「今は、野

邊に屍を晒さば晒せ、蒼海の底にも沈まば沈め、今生に、思ひ置くこと候はず。この世のわかれこそ、只今ばかりにて候ふとも、來世にては、必、一所へ參り合ふべし。さらば、暇申す」とて、出でられければ、三位、薩摩守の後を、遙々と、見送り給ひて、涙をおさへて、立たれたりしに、忠度、「前途程遠馳懷雁山之夕雲」と、高らかに、咏ぜられければ、三位も、いとど、哀に思ひて、涙をおさへて、入り給ふ。

その後、世鎭りて、文治の頃、勅撰あり。今の千載集、これなり。この中にぞ、薩摩守の歌一首を、入れられける。志切にして、優なりければ、數多も、入れたくは思はれけれども、その身、勅勘の人なれば、世に恐れて、名字をだにも、顯されず、「よみ人知ら

ず」とぞ、入れられける。故郷の花」といふ題をもて、よまれたる歌なり。

さざなみや、志賀の都は、荒れにしを、
むかしながらの、山ざくらかな。

その身、朝敵となりにし上は、仔細に及ばずとは、いひながら、口惜しかりしことどもなり。（平家物語）

二二、小枝の笛

一の谷の軍、敗れしかば、武藏國の住人熊谷次郎直實、平家の公達、助船に乘らむとて、汀の方へ、落ち行き給ふらむ、あつぱれ、好き大將軍に組まばやと、思ひ、細道にかかりて、汀の方へ歩まする所に、ここに、練緯に、鶴ぬひたる直垂に、萠木匂の鎧著て、鍬形打ちたる兜の緒をしめ、金づくりの太刀を佩き、二十四さいたる、截生の矢負ひ、滋籐の弓持ち、連錢葦毛なる馬に、金覆輪の鞍置きて、乘りたりける者一騎、沖なる船を目にかけ、海へ、颯と、うち入り、五六反ばかりぞ、泳がせける。

熊谷、「あれはいかに。好き大將軍とこそ見參らせ候へ。まさなうも、敵に後を見せ給ふものかな。返させ給へ。返させ給へ」と、扇を揚げて、招きければ、招かれて、取つて返し、汀にうち上らむと、志給ふ所に、熊谷、波うち際にて、押し並べ、むずと、組みて、どうと、落ち、取つて押へて、首をかかむとて、兜をおし仰けて、見たりければ、薄化粧して、鐵漿黑なり。わが子の小次郎の

齡程して、十六七ばかりなるが、容顏、まことに、美麗なり。「抑、如何なる人にて渡らせ給ひ候ふやらむ。名乘らせ給へ。助け參らせむ」と、申しければ、「まづ、かういふ和殿は誰ぞ」。「物の數にては候はねども、武藏の國の住人熊谷の次郎直實」と、名のり申す。「さては、汝が爲には、好いかたきぞ。名のらずとも、首を取りて、人に問へ。見知らむずるぞ」とぞ、宣ひける。

熊谷、あつぱれ、大將軍や。この人一人、討ち奉りたりとも、負くべき軍に、勝つべきやうなし。また、助け奉りたりとも、勝つ軍に、負くる事も、よも、あらじ。今朝、一の谷にて、我が子の小次郎が、薄手負ひたるをだにも、直實は、心苦しく思ふに、この殿討たれ給ひぬと、聞き給ひては、父母の君たち、さこそは、歎き

悲みたまはむずらめ。助け參らせむとて、後を顧みたりければ、土肥、梶原、五十騎ばかりにて、出で來る。熊谷、涙を、はらはらと、流して、「あれ御覽候へ。いかにもして、助け參らせむとは、存じ候へども、味方の軍兵、雲霞の如くに、みちみちて、よも、通し參らせ候はじ。あはれ、同じうは、直實が手にかけ奉りて、後の御跡をも仕り候はむ」と、申しければ、ただ、「何樣にも、疾う疾う、首を取れ」とぞ、宣ひける。熊谷、餘りに、いとほしくて、何處に、刀を立つべしとも覺えず、目もくれ、心も消え果てて、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く泣く、首をぞ搔きてける。「あはれ、弓矢取る身ほど、口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、何しに、只今、かかる憂き目をば

見るべき。情なうも、討ち奉りたるものかな」と、袖を顔におし當てて、さめざめと、泣き居たり。

首を包まむとて、鎧直垂を解きて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ、腰にさされたる。「あな、いとほし。この曉、城の内にて、管絃を給ひつるは、この人にておはしけり。當時、味方に、東國の勢、何萬騎かあるらめども、軍の陣に、笛持つ人は、よも、あらじ。上臈は、なほも、やさしかりけるものを」とて、これを取つて、大將軍の御見參に入れたりければ、見る人、涙を流しけり。後に聞けば、修理大夫經盛の乙子、大夫敦盛とて、生年十七にぞなられける。それよりしてこそ、熊谷が發心の心は、出で來にけれ。件の笛は、祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽の院より、下し賜はりたりしを、經盛、相傳せられたりしを、敦盛、笛の器量たるによりて、持たれたりけりとかや。名をば、小枝と申しけり。狂言綺語の理と、いひながら、遂に、贊佛乘の因となるこそ哀なれ。（平家物語）

二二、鳳笙の秘曲

源義光は、豐原時元が弟子なり。時秋、いまだ、幼かりける時、時元は、うせにければ、大食調入調曲をば、時秋には授けず。義光には、慥に、教へたりけり。陸奥守義家朝臣、永保年中に、武衡・家衡等を攻めける時、義光は、京に候ひて、かの合戰のことを、傳へ聞きけり。暇を申して、下らむとおもけるを、御ゆるしなか

りければ、兵衛尉を辭し申して、陣に、弦袋をかけて、馳せ下りけり。近江の國、饒の宿に著く日、花田の單狩衣に、青袴きて、引入烏帽子ゑたる男、後れじと、馳せ來るあり。あやしう思ひて、見れば、豐原時秋なりけり。「あれはいかに。何しに、來りたるぞ」と、問ひければ、とかくの事はいはず。ただ、「御供仕るべし」と、ばかりぞいひける。義光、「この度の下向、物さわがしきこと侍りて、馳せ下るなり。伴ひ給はむこと、もつとも、本意なれども、この度におきては、然るべからず」と、頻りに、止むるを聞かず。强ひて、從ひ給ひけり。力及ばで、諸共に、下りて、遂に、足柄の山まで、來りにけり。

かの山にて、義光、馬を控へて、いはく、「止め申せども、用ひ給はで、これまで、伴ひ給へること、その志あさからず。さりながら、この山には、定めて、關もきびしくて、たやすく、通すこともあらじ。義光は、所職を辭し申して、都を出でしより、命をなきものにして、罷り向へば、いかに、關、嚴しくとも、憚るまじ。かけ破りて、罷り通るべし。それには、その用なし。速に、これより、歸り給へ」と、いふを、時秋、なほ、承引せず。また、いふ事もなし。その時、義光、時秋が思ふ所を悟りて、のどかに、打寄りて、馬よりおりぬ。人を遠くのけて、柴を切り拂ひて、楯二枚を敷きて、一枚には、わが身座し、一枚には、時秋をすゑけり。軈より、一紙の文書を取り出でて、時秋に見せけり。父時元が自筆に書きたる、大食調入調曲の譜。また、「笙はありや」と、時秋に問ひければ、「候

ふ」とて、懷より取りいだしたりける、用意のほど、まづ、いみじくぞ侍りける。その時、「これまで慕ひ來れる志、定めて、この料にてぞ侍らむ」とて、すなはち、入調曲を授けてけり。「義光は、かかる大事によりて下れば、身の安否、知りがたし。萬が一、安穩ならば、都の見參を期すべし。貴殿は、豐原數代の樂工、朝家要須の仁なり。われに志をおぼさば、速に、歸洛して、道を全うせらるべし」と、再三、いひければ、理に折れてぞ上りける。（古今著聞集）

二四、ジャンヌ、ダルクその一

凡、國家の興亡に際しては、古より、奇しき事の、いと、多かり。

これを說くもの、或は、神佛の威靈といひ、或は、鬼神の魔力など、稱ふめれど、所詮は、時運のおのづからなる勢に外ならざるべきか。さるにても、ジャンヌ、ダルクの事蹟こそ、いとも、怪しき事の限なれ。

ジャンヌ、ダルクの生れたるは、佛蘭西の片田舍、ドムレミーとて、羊飼の、多く、住へる村なり。時は、西曆一千四百十二年の正月にして、英・佛の戰、正に、闌なる頃なりき。其の父母は、正直なる農夫にして、貧苦の中にも、その子の養育に、心を盡しけり。ジャンヌは、十

三歳までは、羊の群の見はりに、何事もなく、田舍の一少女として、暮しにき。

然るに、奇しくも、又、驚くべきことこそ、彼の身の上に起りたれ。ある夏の日のことなりき。彼、常の如く、後園にありし時、寺院の方に、まばゆき光の見ゆると、同時に、何處ともなく、聲ありて、「ジャンヌよ。善良なれ。怠なく、寺院に詣でよ」と、告げぬ。彼は、いたく、驚きて、四邊を見廻せば、遙あなたの空より、三人の聖者、無數の天使に圍まれて、ジャンヌの傍に來り、親しく、彼と、種々の物語をなしたる末、「ジャンヌよ。汝は、佛蘭西の難に赴かざるべからず」と、いひければ、彼は、恐れ、且、驚きながら、答へぬ。「聖者よ。わらはは、助なき、愚なる田舍娘にて侍り。馬に騎ることだにかなはぬ身にて、いかでか、さる事のあらるべき。」聖者は、「否とよ。憂ふるなかれ。唯、將軍ローベールの許に行け」と、告げぬ。ローベールは、佛軍の一方の大將にてありけるなり。

ジャンヌは、この時より、屢、かかる幻影を目擊し、聖者は、その度毎に、「佛蘭西の難に赴け。將軍ローベールに行け」と、彼に告げぬ。かれは、初の中は、唯、事の奇異なるに、思ひ惑ひしが、おひおひ、その心に、一種の自信を喚び起し、終には、母國の危難を救ふをば、己の天職のやうに、確信するに到りぬ。父母は、其の子の樣子の、年毎に、異樣になりまさるを見て、さまざまに、諫めしかど、其の効もなく、はては、狂氣じみたる行をさへ、現

しぬ。

「オルレアン城危し」との警報は、この時、彼の耳に達しぬ。ジャンヌは、「時到れり。時到れり」と、叫びつつ、其の父母の、呆れて、止むるをも聞かず。單身にして、チークールユールといへる處に陣取れる、將軍ローベールの許に、急ぎぬ。十七歳の少女が、赤手を揮つて、其の國難を鎭めむと、望む。彼を知れる人、いづれも、彼を、「狂したり」といひしは、げに、理なりけり。

二五、ジャンヌ、ダルクその二

今や、佛蘭西國の運命は、オルレアン城の上に懸りたり。この城にして陷らば、佛軍は、その最後の根據を失ひて、佛蘭西の社稷は、永く、その祀を絶たむ。されど、大厦の覆らむとするや、一木の支へ得べきにあらず。所在の將士、意氣沮喪し、その敗軍を擁して、徒に、憤慨の日を送りけり。

將軍ローベールは、チークールユールといへる所にあり。一日、佛國の前途を想ひて、憂慮に沈みける折から、容貌秀麗なる一少女、鄙びたる衣裳を著けたるが、「佛蘭西の救の爲に來れり」と、告ぐ。これぞ、ジャンヌ、ダルクなりける。

將軍は、あくまで、ジャンヌを、一狂女なりと、思へり。引見して、試に、その故を問へば、「わらはは、神の示現によりて、佛國の危きを救はむが爲に、來れるなり」と、答ふ。その擧止動作は、あながちに、狂人とも見えざれば、重ねて、「その求むる所、如何」と、

問へば、ジャンヌは、次の如く答へぬ。

「將軍よ。わらはの言を信ぜよ。神は、數年前より、わらはの前に現れて、幾度となく、『佛蘭西國の危難に赴き、この國のまことの王なる查斯（ちゃーるす）を助けよ』と、告げ給ひぬ。將軍、願はくは、わらはに假すに、一隊の兵士を以つてせよ。わらはは、それを率ゐて、直に、オルレアン城の圍を解かむ。將軍、疑ふなかれ。これ、神の命ずる所なり」。

熱誠面に顯れ、一種の神采、人の心を壓して、さながら、古の豫言者も、かくやありけむと、思はるるばかりなりければ、將軍をはじめ、並み居る人々は、そぞろに、畏敬の情をぞ起しける。されど、教育なく、門地なき、牧羊者の小娘子の身を以つて、

よしや、神通の威力を具へたればとて、今日の危機を、如何かすべき。雲の如き英將猛卒も、敗衄の餘弊を、如何ともするなき今の時、ジャンヌ、何者なれば、かくは、神命を負うて、この不敵の言をなすかと、言ひ合せねども、誰しも、かく思はざるはなかりき。されど、苦しき時の神だのみ、百方計盡きて、望失せたる時は、かひなしと、知りつつも、萬一の僥倖を賴みて、人の助を求むる、亦、やみ難き人情なり。將軍ローベールも、ジャンヌの言を、信じたりとにはあらねども、いはば、物の試にとて、言ふがままに、一隊の兵士を貸し與へ、且、曰ひけらく、「少女よ。行け。汝の身の上に、何事の起るとも、予の知る所にあらず」と。

一千四百二十九年四月五日、ジャンヌは、軍裝して、馬に跨

り、將軍ローベールが貸し與へたる、一隊の兵士を率ゐて、オルレアン城の救に赴きぬ。

道に、シノンといへる村を過りて、査斯七世の、恰、この村に留れるに遇ひぬ。査斯は、ジャンヌの、不測なる力あるを聞き、その實否を試みむと欲し、從者と、その服を換へ、みづからは、王座はるかに、從者の群に入り、ゑかして後、ジャンヌを引見せり。ジャンヌは、神の聲に導かれ、直に、査斯の前に跪きぬ。査斯は、「予は王にあらず」と、答へ、かの從者の、王座に著けるを指して、「査斯王こそ、彼處におはすなれ」と、告げぬ。ジャンヌは、頭を打振りて、曰へらく、「否、佛蘭西の眞の王たらむもの、陛下をおいて、何處にか求むべき。これ、神の命なり」と、王は、ジャンヌに、その名と、來れるゆゑよしとを、問ひぬ。ジャンヌ、答へて曰はく、「賢明なる王よ。わらはの名は、ジャンヌ。陛下の戴冠式を、レームに行はむが爲に、神の送り給へる處女にて侍り」と。

レームは、歷代の佛蘭西王が、戴冠式を行ふ所なり。されど、多年の戰亂の爲に、レームは、英軍の手に入り、査斯七世は、尙、未、この大禮を行はせ給はざりしなり。

ジャンヌの評判は、日を追うて、遠近に傳りぬ。或は、狂と詆り、或は、聖と稱へ、褒貶の聲、一時に喧しかりき。されど、「ドムレミーの一少女が、佛蘭西國の救の爲に起てり」といふ事は、均しく、國民の耳目を驚せり。僧侶の或者は、ジャンヌの信仰を試みしが、いづれも、その燃ゆるが如き、熱誠に感激して、神の

威靈の、眞に、其の身に宿れるを思ひぬ。加ふるに、その頃、佛蘭西には、「佛蘭西は、一女子に救はるる時あるべし」との流言、久しき前より、傳りければ、その一女子こそ、ジャンヌならめとの信心は、いつしか、多數國民の胸中に起りぬ。

さるにても、ジャンヌは、如何して、オルレアン城の圍を解くべきか。これ、萬人の、ひとしく、危み、且、憂ひし所なり。

二六、ジャンヌ、ダルク　その三

ジャンヌの、蕞爾たる小軍隊は、當時、英・佛兩軍の規律なきに比して、實に、驚くべき整正と、純潔とを保ちたり。其の先鋒には、常に、僧侶あり。嚠喨たる音樂につれて、壯快幽玄なる讃歌を誦し、ジャンヌの統率せる中軍は、嚴々として、その後に繼ぐ。ジャンヌみづからは、白馬に跨り、長劍を横たへ、銀甲の粲爛たるを著け、威風、あたりを拂うてぞ見えにける。部下の兵士は、いづれも、先には、輕侮の念を挾みしが、いつしか、敬仰の情に打たれ、この一少女の爲に、喜んで、身命を抛たむと、誓はざるはなかりけり。

同じ年の四月の末日、ジャンヌは、オルレアン城の下に達したり。所在の將士、風を望みて相會し、愈、五月一日を以つて、英軍攻擊に著手せり。この一軍は、道に、ジャンヌの故鄕なる、ドムレミーの傍を通過せしが、彼は、その舊友なる、村の娘等と會し、事もなげに、嬉戲して、一夕を費せりとぞ。あはれ、佛蘭

西國の救主も、干戈匆忙の間に、一村娘となりて、牧羊犂鋤の往日を忍べるは、いかに、怪しきばかりに、趣味深きことなりけむ。もし、豫、ジャンヌにして、將に來らむとする、悲慘なる運命を知りたらむには、その腸、いかに、九回ゐたるべき。

オルレアン城の攻撃は、實に、目ざましきものなりき。援軍の爲にとて來れる、將士の中には、ジャンヌを戴くを好まざる者、少からざりしが、一度、ジャンヌの働を見たる後は、何人も、かれが、非凡の威力を、信ぜざるはなかりき。ジャンヌの、身、戰場に立つや、一挺の軍旗を提げたるのみ。未、嘗、劒を拔きて、人を斬りたる事あらず。彼は、自、公言して曰はく、「吾は、これ、神の大命によりて、此の國の危難を救はむが爲に、この世に出でたるなり。吾が前には、刄も、矢も、その力を失ふべし。これ、我が體は、この世の物に造られざればなり」と。かくて、かれ、戰に臨むや、常に、全軍に先だち、矢石亂飛の間を馳騁し、叱咤督勵、到らざる所なし。かれに從へる前列の兵士、敵丸に中りて、數十百人、たちどころに、仆るるが中に、奇しきかな、ジャンヌは、身、一丸一矢を受けず。悠然として、干戈の間を周旋するさまは、眞に、人業ならず見えにけり。

英吉利軍が、七個月の間續けたる、オルレアン城の包圍は、ジャンヌ、十日にして、これを潰えしめたり。この目ざましき勝利は、素より、部下將士の忠烈に因るといへども、これを統率し、皷舞したる、ジャンヌの勢力、その主因なること、掩ふべ

くもあらず。實に、これ、驚くべき勝利なりき。當時、佛蘭西は、國を擧げて、英吉利軍の蹂躪に委ね、ひたすら、屏息して、その鋒を避けむことを、つとめたり。オルレアン城中に圍まれたる、佛の將士だに、ジャンヌの援軍に、重きを置かず。この包圍にして、今後、一個月も續きたらむには、何人も、苦節を維持し得べしとは、思はざりき。ジャンヌが、一擧して得たる、この勝利は、敵も、身方も、奇蹟の如く、驚けり。

是において、ジャンヌの名は、驚駭と、恐怖とを以つて、喧傳せられ、一時、絶望の淵に沈みたる佛軍の士氣は、打萎れたる草木に、春雨の注げるが如く、忽、一道希望の光にうたれ、猛然として、振ひおこれり。これより後、凡、百年の間、向ふ所、敵なかりし英軍も、勢、頓に、挫け、さながら、魍魎の、日光に消ゆるが如く、やうやく、國外に退去しぬ。七月の中頃、査斯七世は、凱旋歡呼の中に、ジャンヌと伴ひて、レームに入り、盛なる戴冠式を行ひぬ。ジャンヌが、天の使命は、その言の如く、茲に、その全きを告げぬ。

二七、ジャンヌ、ダルク　その四

さても、佛蘭西國の救主、査斯王の恩人、ジャンヌ、ダルクの最後こそ、痛ましけれ。彼は、古今に稀なる、かかる奇功を奏したる後、英吉利軍の手に渡りて、火焚の刑に處せられたり。

その由來いかにと、尋ぬるに、オルレアン城の圍を解き、査

斯王の戴冠式に臨みたる後、ジャンヌは、自、かれが、天より受けたる使命の、終を告げたるを宣言し、王に乞うて、再、ドムレミーの田舍に、歸らむことを求めぬ。されど、英・佛の戰、なほ、熄まず。佛蘭西が、彼を要する時機、未、去らざる故を以つて、その願、許されず。時、恰、コムピーニュといへる城、なほ、英軍の圍を受けしかば、ジャンヌは、王命により、援軍をひきゐて、城内に投じたり。

ある日の戰に、ジャンヌは、城を出でて、散々に、敵を惱し、凱歌を揚げて、引還さむとゐけるに、こはいかに。城門の懸橋は、既に、撤去せられ、ジャンヌは、その僅なる手勢と共に、城外に殘され、遂に、英軍の爲に、擒にせられぬ。かく、城内の佛軍が、ジャンヌの歸路を絶ちたるは、偶然の錯誤なるか、又は、叛逆人の所爲なるか。その事實、今に到りても、さだかならず。されど、ジャンヌは、その以前より、自己の運命を覺りしものの如くなりき。そは、「聖ヨハネの祭日の前には、己は、必、敵軍に擒にせらるべし」とは、彼が、常に、知人に、物語りし所なり。唯、何故に、又、如何して、擒にせらるるかは、彼、自も、知らずといへりとぞ。又、生擒せらるる數日前、教會の祈禱の後、かれは、周圍の人に、公言して曰ひけらく、「吾が親愛なる朋友よ。この城内に、吾を、敵に賣るものあらむ。かくて、吾は、死に處せらるべし。されば、友よ。吾が爲に、神に禱れよ」と、恐らくは、コムピーニュの城内に、叛逆人ありて、こと更に、ジャンヌを、敵中に陷れしならむ。

ジャンヌは、既に、敵の手に渡りぬ。げに、此の一少女ありて、オルレアン城の圍を解きたればこそ、英軍の勢、頓挫して、振はざるに到りしなれ。ジャンヌは、英國人が、その肉を食ふも、あき足らずとする所なり。是において、形ばかりの軍法會議は開かれ、直に、火焚の刑に處せられたり。これ、一千四百三十一年五月三十日にして、處は、ルーアンといへる市、ジャンヌの年は、僅に、十九なりき。

これ、不幸なる女丈夫、ジャンヌ、ダルクの生涯なり。歴史は永く、人物は多しといへども、田舍の一少女子を以つて、かかる偉大なる功業事蹟を留めしもの、他に、何處に、求むべきか。ジャンヌは、佛蘭西を救ひて、其の天の命を全うせり。さらば、その二十年の短生涯は、やがて、佛國千年の社稷にあらずや。ジャンヌ、また、以つて、瞑すべきなり。（高山林次郎）

改訂

高等女子讀本卷七

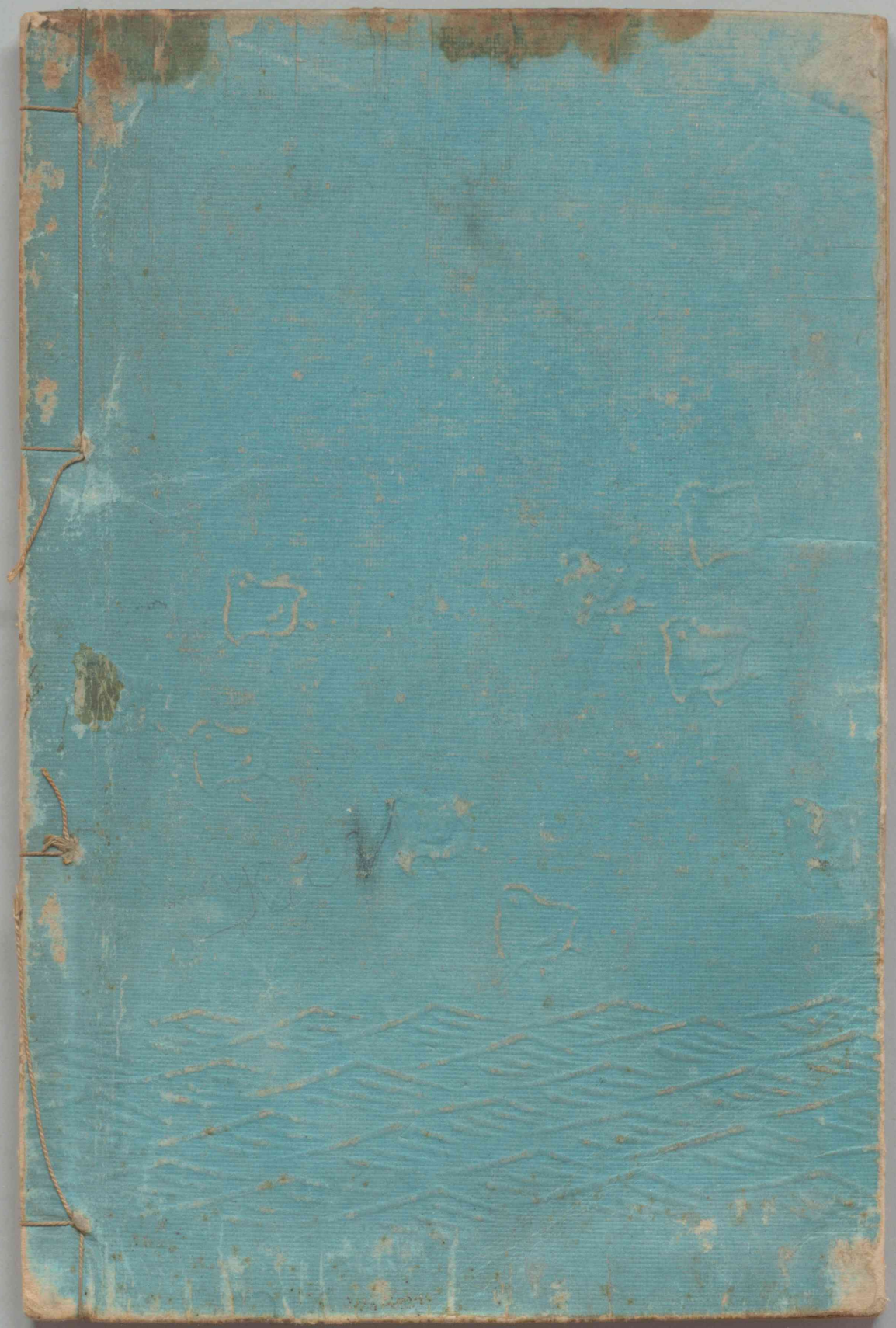
終

明治三十六年三月十四日訂正再版印刷
明治三十六年三月十七日訂正再版發行
明治三十九年一月十九日訂正廿七版印刷
明治三十九年一月廿二日訂正廿七版發行

全十冊定價 各金貳拾參錢

校訂者 佐藤球
編纂者 明治書院編輯部
發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地 三樹一平
印刷者 東京市神田區雉子町三十四番地 綾部喜久二
印刷所 仝所 電話本局一七九九番 宮本印刷所

不許複製

發行所 東京市神田區錦町一丁目 電話本局二四三八番 明治書院 振替貯金口座四九九壹番

販賣所 東京市神田南乘物町 電話本局八九二番 明治圖書株式會社 振替貯金口座四九壹五番